

演出と「被写意識」

—1930年代後半の日本の肖像写真とその歴史的背景

甲斐義明 (新潟大学)

1930年代後半は日本の写真家たちが国策プロパガンダ写真の制作に関与した時期として知られている。白山眞理らの研究は木村伊兵衛、土門拳、名取洋之助らが戦時中に所属していた組織や、そこで行っていた活動の実態を明らかにしつつある。だが、それらの研究の大半は写真家と社会との関わりに焦点を当てたものであり、この時期の彼らの作品が実際にどのような形式のおよび主題的特徴を持ち、日本写真史においてそれがどのような意味を持っているかについては十分に考察が行われていない。そこで本発表ではこうした研究状況をふまえた上で、1930年代後半の日本写真史を再検討し、以下の点を明らかにする。まず木村、土門らプロパガンダ写真の制作に積極的に関わった者たちは、政府の外郭団体から依頼された仕事と、自らの意志による表現としての作品を、現在一般にそう信じられているほどにははっきりと区別していなかったということを、当時の出版物の分析を通して示す。それが意味するのは、依頼仕事に彼らは一定の表現上の意義を見出していたということである。彼らのプロパガンダ写真を国家に対する強制的または自発的な奉仕という観点から論じただけでは、それらの写真が制作された背景の半面しか説明したことにならない。

つづいて本発表では、それらの依頼仕事において、いかにしてモデルから「被写意識」(木村伊兵衛)を取り除くかというのが写真家たちに共通の課題であったことを指摘する。それらの仕事の多くは、あらかじめ演出された状況を撮影するものであったため、非演出のキャンディッド・フォトを重視する戦後のリアリズム写真運動以降、否定されることになった。だが、木村『小型カメラの写し方・使ひ方』(1937年)、堀野正雄『私の写真術』(1939年)、濱谷浩『スナップの撮り方』(1939年)といった当時の主要な写真家たちの著作を検討すると、彼らは演出を伴う撮影を必ずしも否定的にとらえていなかったことがわかる。それどころか、演出された状況下で「被写意識」を消して撮影することは、それ自体追求するに値する写真表現上の課題とみなされていたのである。最後に、「被写意識」に対する日本の写真家たちの忌避感は、マイケル・フリードが『クールベのリアリズム』や『なぜ写真はかつてないほど美術として重要なのか』といった著作で論じた、ヨーロッパの肖像画と肖像写真における「反演劇的な伝統」と通じ合うものであることを指摘し、1930年代後半の日本写真史の国際的な同時性を考察する。